

旧大乘院庭園の調査

— 第390次

1 はじめに

平城宮跡発掘調査部では、奈良市高畑町にある旧大乘院庭園を管理する(財)日本ナショナルトラストの委嘱を受けて、1995年度より本庭園の復原整備に向けた基礎資料を得るための発掘調査を継続してきた。本年はその11年目にあたり、まとまった規模の調査としては最後のものとなる。

その経緯を踏まえて、本年は2000年度から進めている西小池の全容解明を目指して、調査が及んでいない西小池南池周辺を調査対象地とした。北に第374次調査区、東に第310次調査区と第352次調査区が隣接するところである(図139)。とくに今回は、池そのものとともに、西側の陸地部分についても情報を得ることが期待された。調査期間は2005年7月19日～10月21日、調査面積は517㎡である。

2 大乘院と大乘院庭園

大乘院は、一乗院とならび両門跡と呼ばれた興福寺の門跡寺院である。平安時代にはじまり、当初は興福寺の北方、現在の奈良県庁舎あたりに置かれたが、治承4年(1180)の南都焼き討ちによって罹災したため、元興寺の別院である禅定院のあった今の場所へ移り、ここが大乘院家と定められた。

その後、宝徳3年(1451)の徳政一揆により焼亡すると、尋尊大僧正は建物の復興ばかりでなく、近世には南都随一とうたわれた庭園の原形も整備した。このとき、造営にあたったのが、名匠とうたわれた善阿弥親子である。善阿弥は足利義政に仕えて慈照寺銀閣の庭園を手がけた人物でもある。

こうして、室町時代に復興なった庭園は、いくばくかの改変を経つつも基本的な姿を維持したまま江戸時代へ至り、第15世隆温大僧正が描かせた『大乘院四季真景図』に描かれることになる。われわれはこの絵図から往時の姿を偲ぶことができる。

しかし、明治維新後、大乘院は廃絶し、御殿の一部は個人宅となり、また、1874年からは小学校として利用されることとなる。その後、一時期荒地となったこともあ

るが、1909年に奈良ホテルが開業し、1958年に西小池のあった場所に大乘苑という旧国鉄の宿泊施設が建てられ最近の景観が作られた。今次の調査は、2003年に1800㎡余の名勝の追加指定に伴い大乘苑が解体されたことから可能となったものである。なお、現在の総指定面積は約15400㎡である。

3 基本層序

調査地周辺は、広域に見れば西に向かって下降する地勢にあるが、調査地域内では南東隅がもっとも高く地表下すぐに地山が露出する。これに対して、西小池の西側では長期間にわたって各時代の包含層が積み重なっており、時代を経るにつれ生活面が上昇していった。なお、当地点の利用は奈良時代にまで遡る。

調査区中央付近の層序は、まず、上から分厚い現代の客土や戦後のテニスコートに伴う石炭殻層があり、その下に調査区全体に及ぶ近代の灰黒色砂質土がある。これを取り除くと、第374次調査区内より続く白色粘土の整地が調査区中ほどまで伸びてきていることが知られた。それをはずしてようやく西小池が営まれている褐色砂質土が現れる。褐色砂質土は地形の傾斜に従って、徐々に高さを減じ、調査区西半は池の底よりも低くなっている。この褐色砂質土の下には鎌倉時代の土器破片を包含する橙褐色砂質土があり、多数の遺構はここまで下げて検出している。しかし、調査区中央の東西畦際で確認したSK9001の年代から褐色砂質土が室町時代の地盤であり、その上にあったであろう江戸時代の層はすでに大半が削平されていると判断できる。最下層の橙褐色砂質土の下はかなり起伏に富んだ鎌倉時代の遺構面となる。

池の中では上より黒灰色土、灰褐色土、青灰色土の順で池の廃絶時に埋め立てた土層が観察された。そして最下層に暗褐色の池底の堆積土が薄く認められた。

ところで、調査区の南側には大乘苑の鉄筋基礎が地中深くまで及んでいた。遺構の破壊を防ぐために撤去をあきらめ、基礎の中は東側の一部分だけの調査に留めた。

4 遺構の概要

室町時代以前

落込SX8975 調査区南西隅で断割調査によって確認した落込状の遺構。範囲は東端を除いてつかみきれいな



図139 西小池と調査区の位置関係

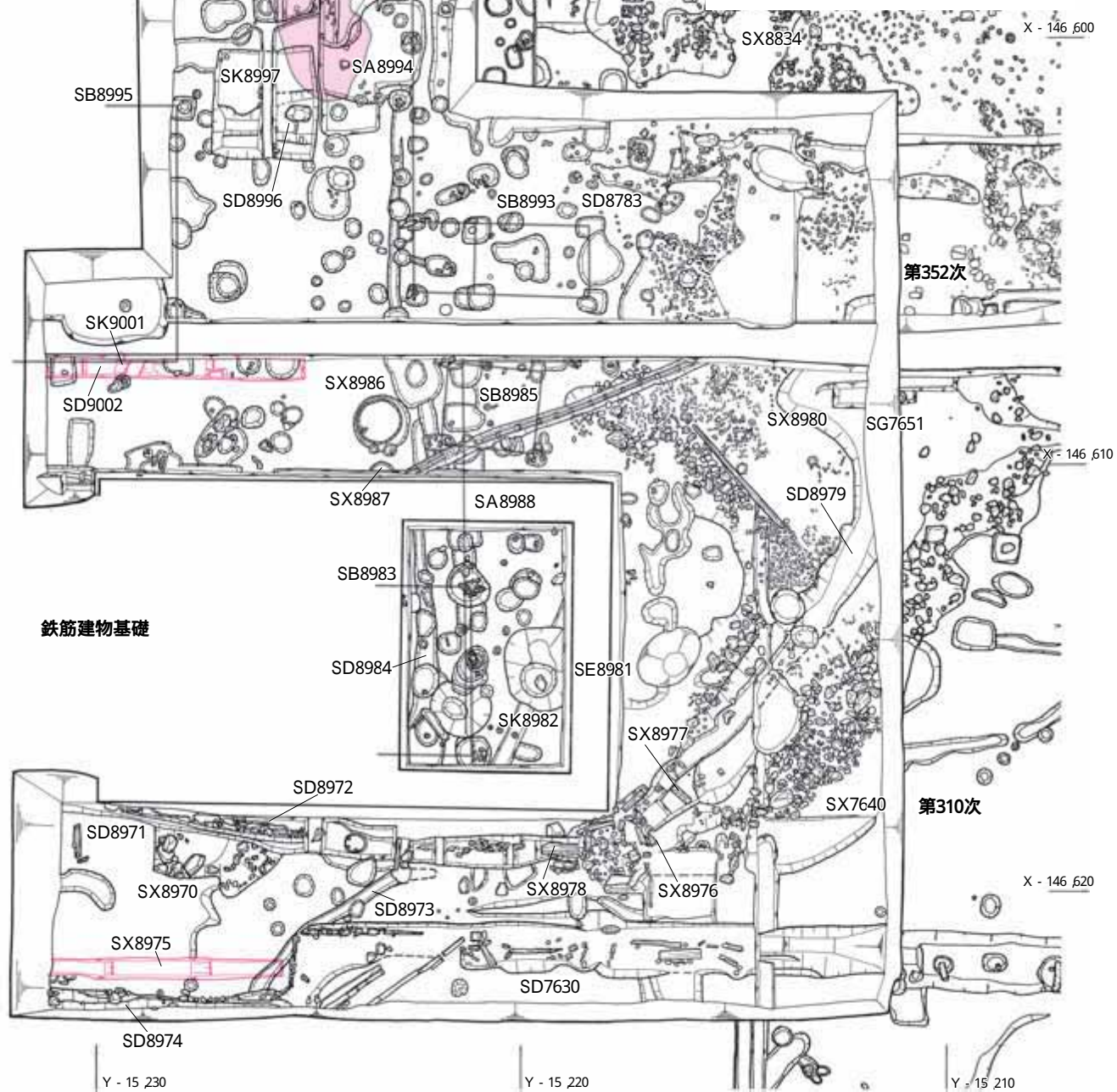


図140 第390次調査遺構平面図 1:150



図141 井戸SE8981

い。奈良時代の須恵器が出土している。

石組SX8970 西小池の排水溝SD8971・8972と鉄筋コンクリート基礎によって北側を破壊されている。掘鉢状に掘りくぼめられた斜面に、大きなもので長さ数10cmにも及ぶ景石を組んだりしていたものが放棄された状態でみつかった。中には砂が堆積しており、かつては水が貯められていたと考えられる。相対的に大きな石は片麻岩で、小さくて多量にある石は大半が花崗岩である。景石に絡むようにして室町時代の土師器が出土している(図147 20)。

なお、同様な石組は建物基礎を越えた北側でも顔を覗かせていて、その間の建物基礎の下には池や庭が展開していた可能性もある。

井戸SE8981 コンクリート基礎の中で検出した素掘りの井戸(図141)。検出面で南北2m、東西0.7m以上、深さ2mの楕円形を呈するが、下に行くにつれ達磨形の平面形となり、底面では達磨の頭に相当する北側部分が一段高い足場となり、南側が水を貯める円形の掘り込みとなって0.5mほど低くなっている。いちばん底で平たい石を1個検出したが、曲物や桶など特別な構造はもっていなかったと見られる。井戸はいっきに埋め戻されたらしく、井戸の中から出土した土器はいずれも平安時代末頃の年代を示している。

土坑SK8982 井戸SE8981のすぐ西にある土坑。南北1.3m、東西1.4m、深さ0.7mを測る。埋土は炭を多く含んだ黒色土で、多くの土師器や瓦器が比較的良好な状態で出土している。出土した土器類はSE8981とほぼ同時に存在していたことを示す。

掘立柱建物SB8983 土坑SK8982に重複して構築された掘立柱建物。柱間は6.5尺等間、南北は2間で東西に長くなる建物と思われる。掘形の底には平たい石を数個据えて礎盤石としている。掘形や抜取穴から良好な遺物が出土していないが、平安時代末の遺構との重複関係から鎌倉から室町時代の遺構と考える。先のSX8970と関連するかもしれない。

掘立柱塀SA8988 SB8983の東妻の位置に南北に並ぶ柱列。柱間は7尺、SB8983に先行し、SK8982の底では柱の想定位置には穴を検出できなかった。それより古い時期のものなのだろう。中央畦際で東に1間延びて、その続きは不明となっている。

なお、建物の基礎の中では、上記以外にも多くの柱穴や土坑が存在しており、西小池完成以前の長きにわたるさかんな土地利用が窺われる。

掘立柱建物SB8995 調査区西壁際で確認した梁行2間の東西棟建物。柱間は梁行10尺、桁行9尺。鎌倉時代の遺構面よりかなり高い位置で検出しているので、室町時代の建物と見られる。規模から考えると群中でも中心的な建物であった可能性がある。

礎敷遺構SX8830 第374次調査で東側の一部を検出していたが、ようやく全貌をつかむことができた。今回の調査では、廃絶時に投棄されていた室町時代の土器を取り上げたのち、土器片を挟みながら堆積している砂とともに、転落して元位置にないと判断された石を除去していった結果、本来の姿が明らかになった(図142)。

それは西から見てh字形のプランをもつもので、東端の高い方から西へ水を流すようになっている。しかし、二股になった西側のいずれの方向へも水を抜くための配慮は認められない。掘り込みは60、70度ほどの急傾斜で、残存状況がよかった西半では、平らな底に玉石を敷き並べていることがわかった。そして、その縁に接するように径10cm前後のチャートを葺き上げるという構造になっている。

この葺石はところによっては玉石の上に滑り落ちているが、それをはずすともとの姿との乖離が著しくなるので、そのまま記録した部分もある。この点東側は大半の葺石が滑っており底が見えないが、よく観察するとやはり底に玉石を敷き並べていることがわかる。

本遺構は鎌倉時代の土器溜りSX8829に重なるように

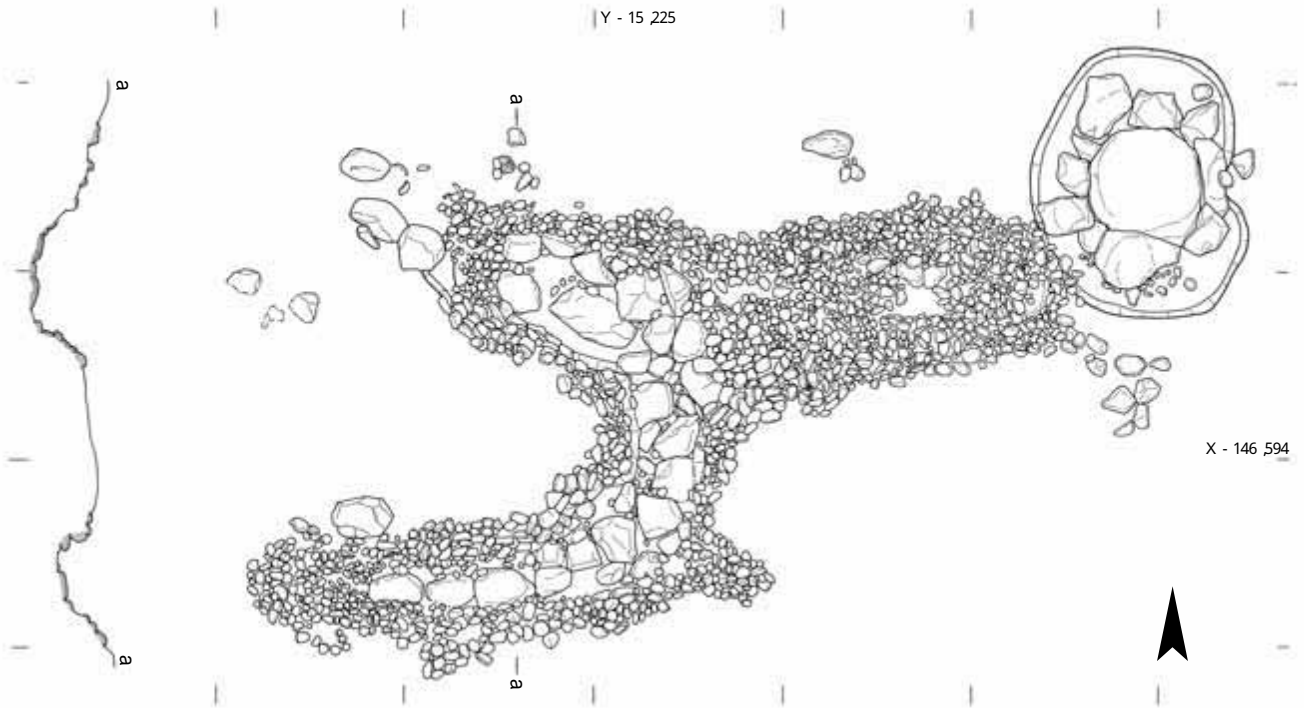


図142 礫敷遺構SX8830と石組SX8831 平面図 1:40

営まれており、部分的に葺石のはずれた掘り込みの壁には土器の堆積が顔を出している。

石組SX8831 内径60cm、残存深さ40cmの円形石組井戸として第374次調査で報告したもの。楕円形の掘形には細かい礫が詰められている。SX8830と接し、構築順序はSX8830より新しいが、廃絶時における室町時代の土器の捨てられ方が同様であったことから、両遺構は同時に機能した可能性が高い。井戸とするには浅く、湧水点にまったく到達しておらず問題である。蹲の性格をもっていたものだろうか。

土器溜りSX8829 やはり第374次調査で確認していた鎌倉時代の土器を多量に包含する遺構。西側の範囲についてはほぼ明らかになったが、南側は方形土坑群によって破壊されているために厳密な広がりには不明である。しかし、第374次調査成果とあわせれば東西約4.5m、南北約10.5m以上の不整形で大規模なくぼみ状遺構であったことがわかる。

南北溝SD9002・9003 調査区の中央と北端の断割調査で検出した南北方向に走る素掘り溝。一連かもしれない。第374次調査で検出したSD8825同様、鎌倉時代以前に遡る可能性がある。

土器埋納土坑SK9001 調査区中央の畦で確認された直径約15cm、深さ約20cmの小ピット。図147にある室町時代の土器が重ねられた状態で埋納されていた。

江戸時代

西小池SG7651 西小池はヲシマと呼ばれる中島SX8770以南を南池と呼びわけており、平面形はちょうど人字形を呈している。今次の調査ではちょうど第一画のはらい

に相当する部分の西岸をはじめて検出し、既往の調査とあわせ南池西半が確定した(図140)。

池の輪郭は東岸と西岸では対照的な様相を見せる。緩く湾曲する東岸に対して、西岸は調査区中ほどで大きく入江状に3mほど西へ入り込み、その北側の岬状張り出しとともに変化のある汀線を描いている。ただし、岬状部分の先端付近は現代の攪乱により基底まで削られてしまっており、第374次調査での知見を参照するしかない。改修護岸SX7640 東岸の石を葺いた部分は、幅2m前後で北東より南西方向に緩いカーブを描きながら続いている。第310次調査では、この東岸の護岸工法として、構築時に地山を削りだした後に、粘質土による裏込めを施しその上に石を組んでいるとしたが、そうした裏込めは西岸には認められず、地山に直接石を葺くか、わずかな土をかませるかして仕上げている。このことから、もともと東岸では裏込め検出ラインに近い位置に岸があったが、ある段階で大きく狭められたことが考えられる。

東岸の石の多くは、人頭大かそれ以上の石を斜面に対して平行に貼り付けたようになっている。ただし、上方のものには斜めに突出するように組まれているものがある。それでも、本来の景観をとどめているとは言いがたく、より垂直に立てられていた可能性がある。

また、堰SX8976を越えてより西側にまで護岸が伸びていて、池尻がより西に伸びていた時期があったことがわかる。

両岸を通じて使用されている石材は片麻岩が多く、安山岩がこれに次ぎ、チャート、花崗岩、頁岩などが若干混ざる。その中でも大きな石には片麻岩を使用している。



図143 西小池SG7651 西岸

なお、改修のあとが認められない西岸は東岸に比べると攪乱がひどく、石の残っている範囲も狭い。水平に横たわる松の倒木によって崩落をくい留めたか、それを基礎に葺いていったかのように見えるところもあり、ほとんどの石はずり落ちていると判断される。石材は、東岸同様の構成を見せるが、チャートが多く、小さい。西岸では石を立てて使うことは少なかったと思われる。

池底の礫敷SX8980 西岸側に比較的良好に残っており、本来池底全面に施されてあったと考えられる。平均して5～10cmの礫が多いが、3cmほどの礫も使われている。礫種は黒っぽいチャートが6、7割を占め、残りは花崗岩系の礫である。

堰SX8976 西小池が全面に水を湛えていた最終段階に機能していた水量調節用の堰である。拳大のチャートを一列に並べた上に、細長い板を杭で固定する構造であったことがかろうじてわかる。堰の板は朽ちていて本来の形状や大きさはわかりにくい、複数枚を水平に重ねて使用していたようである。現存部位での最上面の標高は89.6mであるので、水面の高さはそれより幾分か高かったことは確かである。

堰SX8977 SX8976とは別に池の内側に1.2mほど寄った位置にも堰を設けていたことを示す長方形の抜取痕跡を確認した。

排水溝SD8979 西小池が完全に廃絶する前には、水の溜まった範囲が北側にかなり狭められていた時期があった。この段階の排水溝が本来礫を敷いていた西小池の底をさらに掘り込んで設けられている。その延長は本来の



図144 西小池SG7651池尻と排水溝群

池尻の外側でSD8972の土管に接続して西へ排水していたと推測される。溝の中には腐植土が詰まっていた。土管との接続部の正確な位置や構造はわからない。これは、第310次調査で岸際を特に深く掘り下げたと理解したものに相当する。

土管溝SD8972 SD8978の水を受けて暗渠として西へ水を抜くための土管溝。土管は瓦質のもので、江戸時代後半から末に製作されたと見られる。SD8973と完全に重複し、回りが砂で安定が悪いせいか、平瓦や別の土管の破片を下に敷いている。西に排水することを考え、東側に口がくるように土管と土管をつなぐ。

排水溝SD8971 池の水を西に抜くための溝。開渠で、砂が詰まっていた。堰によって西小池と隔てられている。平均して幅は70cm、残存深さ20cmを測る。

排水溝SD8973 西小池の排水溝の中で確認できたもっとも古い溝である。ただし厚いところでも砂の厚さは5cmほどであった。南西に向く西小池池尻の延長上をS字形に緩く湾曲しながら伸びる点で、他の排水溝と向きを異にする。江戸時代以前にさかのぼる可能性もある。

木樋SX8978 池底と同じレベルで部分的に検出した木樋である。西小池池尻が狭められる前の南岸に並行する東西方向に据えられている。したがって東岸改修以前に機能していたものと思われる。スギを削り抜いて作ったもので、樹皮だけが断面コ字形に残っていた。そのレベルからすると、堰を越えた水を抜くものではなく、池の水を抜くときに機能させた施設であったと考えられる。

塀SA8994 第374次調査で検出したSX8843、SX8845～



図145 大乘院四季真景図の西小池と湛雪亭

8847を含む柱穴列が池の西岸で一直線に並ぶことが確かめられた。対になる柱穴列がないため、廊下状の遺構ではなく塀と判断した。南北方向に7間分確認している。北端と南端の各一間分を除けば1.8~2.0m間隔で、径約40cmの柱穴の底には柱の沈下を防ぎ安定をはかるために、平たい石や栗石を置いている。その柱どうしをつないで絵図に見るような池と宅地とを隔てる塀を作っていたと考えられる(図145)。

ところで、調査区北端でみつがっている最北の一間が3.3mと破格に長く、逆に南端の一間は1.4mと短い。このことは、後に触れるが、それぞれその部分で構造が異なるものに接続していたことを示す。

布掘溝SD8984 SA8996と筋を揃えるように調査区中央の畦以南で検出した浅い溝状遺構。鉄筋建物の基礎の中ではもっとも南側で西に反れる。埋め土は砂や粘土など水の流れたことを示すものではなく、布掘遺構と思われる。SA8994と一直線に並ぶことからこれも池と宅地を隔てる遮蔽施設の基礎部分の遺構と考えられる。

建物SB8993 SA8996のもっとも南側の一間とほぼ柱筋をそろえる東西に長い一間×一間の建物跡が塀の1.4m東でみつかった。東西2.8m、南北1.7mを測る。柱穴は大きなものではなく、かつそれほど深くない。礎石を用いた建物であったのだろう。立地と建物の性格上、周囲の穴のいくつかは縁を支える柱の穴と思われるが特定できない。これが『大乘院四季真景図』に見る濡れ縁がめぐるあずまや風建物とすると、「湛雪亭」と呼ばれていたことが知られる。ただし、遺構は梁行が狭く、絵図に描かれているものとは若干趣きを異にする。



図146 上層南北溝SD8989~8992

建物と塀の間はちょうど一辺1.4mの正方形の空間となるが、絵図からも窺われるようにこの部分は建物の延長として利用されていた可能性が高い。

建物SB8985 畦を挟んでSB8983と対照的な位置でやはり小さな建物跡になる可能性のある柱穴群一組をみつけた。これは東西2.2m、南北2.0mとほぼ正方形のプランをもつもので、SD8984の東にわずかに0.5m離れて作られている。方位が若干北で東に振っていることもあり、積極的な評価が難しい。

方形土坑群SK8997・8998・8999 塀の西側に、瓦や人頭大の石を投棄した方形土坑3基がある。南側から順に、SK8997、8998、8999とする。SK8997とSK8999の形態・大きさや方位はよく似ており、無関係に営まれたものではないと判断される。

このうちSK8999は瓦や石がとくに大量に詰まっており、御殿や庭園の建て替えに際して生じた廃材を埋めた遺構と考えられる。内部から出土した瓦は江戸時代後半のものが主体である。石材はほとんどが片麻岩でわずかにチャートを含む。この様相は池の護岸の礫種と大きな相違はないが、それらに比べて小ぶりであり、5~10cm大である。大ぶりの東岸の新しい護岸に改作される前に用いられていた護岸の石であろうか。あるいは使用せず廃棄されたものである可能性もあるが、瓦は御殿の葺き替えに伴うものと見るのが自然である。

水溜遺構SX8986 SD8984の西際で桶を地中に埋めた水溜遺構を検出した。桶は残存部最上位の直径105~110cm、底部の直径96cm、残存高74cmを測る大型品で、外側下部には竹製の箍3条からなるぐい編みが残る。桶の掘

形は検出面上面で1.3mとさほど広くなく、必要最小限の大きさに作られていることがわかる。桶の底板には墨書で「水溜」と墨書されているほか、2カ所に焼印が認められる。内部からは寛永通宝1枚を除くと木片や陶磁器碎片などがわずかに出土したにすぎない。ただし、桃核が1点出土している。

水溜遺構SX8987 一回り小さい桶を用いた水溜遺構がSX8986の1m南にみつかった。コンクリート基礎の直下にあたり遺存状況がかなり悪い。桶は縦板を箍で締める構造においてSX8986の桶と同じであるが、その詳細については破損がひどくわからなかった。

近代以後

排水溝SD7630 第310次調査区から続く断面逆台形の東西溝。東大池の水を西へ排出する。東大池の取り付け場所から約28mのところ、クランク状に折れ曲がり、さらに西へ延びていくことが確かめられた。屈曲地点の2.5m手前付近から西は、護岸の片麻岩や花崗岩からなる石列が右岸にのみ残っていた。本来左岸にもあったかどうかは不明である。なお、屈曲部だけは石に替わって板を立てて護岸している。

そしてこの溝が埋め立てられる過程で杭がほぼその中心に沿って打ち込まれている。これは近代の境界杭であり、第310次調査で出土した工部省(1870~1885年)の標柱と一続きのものである。土地の境界線が溝の位置を踏襲したことがわかる。溝埋め立て土には建築廃材が多数放り込まれていた。

排水溝SD9874 調査区南端で検出した東西溝。SD7630西半に重複して掘り込まれている。現代のガラスをはじめとする塵芥が詰まっていた。ただし、コンクリート製の斜行する排水溝に切られながらもそのまま東へ伸び、南壁にもぐりこんでいく。大乘苑が建っていた時期の排水溝と思われる。左岸は検出できていないため、幅や深さは不明である。

南北溝群SD8989~8992 調査区北半で褐色砂質土を掘り込む形でみつかった同形態の4条の素掘り溝(図146)。幅約40cmでほぼ正方位に乗る。埋土からはほとんど中世の遺物しか出ないが、わずかに近代以後の陶磁器片や寛永通宝1枚が出土した。白色粘土の西端より西側で検出したが、層序の観察からそれより新しい時期のものと思われる。ただし性格は不明である。(高橋克壽)

5 主な出土遺物

表20 第390次調査 出土瓦磚類集計表

| 軒丸瓦 | | 軒平瓦 | |
|------------|--------|--------------|--------|
| 型式 | 点数 | 型式 | 点数 |
| 6201A | 1 | 鎌倉 | 2 |
| 巴(鎌倉後半) | 1 | 室町 | 1 |
| 巴(室町後半) | 2 | 室町後半 | 2 |
| 巴(江戸前半) | 15 | 江戸前半 | 11 |
| 巴(江戸後半) | 9 | 江戸後半(刻印付1点含) | 12 |
| 巴(江戸後期) | 1 | 江戸 | 6 |
| 巴(江戸) | 3 | 中近世 | 1 |
| 小型菊丸(室町後半) | 1 | | |
| 小型菊丸(室町) | 1 | 軒平瓦計 | 35 |
| 小型菊丸(江戸前半) | 7 | | |
| 小型菊丸(江戸後半) | 13 | 軒棧瓦(江戸後半) | 2 |
| 小型菊丸(江戸) | 1 | | |
| 菊丸(室町後半) | 2 | | |
| 菊丸(江戸) | 1 | 道具瓦 | |
| 室町 | 1 | 熨斗瓦(箱・割熨斗含む) | 5 |
| 江戸前半 | 2 | 刻印丸瓦 | 1 |
| 江戸 | 5 | スタンプ付き平瓦 | 1 |
| 棟飾り(江戸) | 1 | スタンプ付きレンガ | 1 |
| 中近世 | 1 | 道具瓦 | 9 |
| 軒丸瓦計 | 68 | 軒平瓦計 | 17 |
| 丸瓦 | | 平瓦 | |
| 重量 | 69.4kg | 228.2kg | 9.04kg |
| 点数 | 620 | 2072 | 10 |
| | | | 175 |

瓦磚類

出土した瓦磚類を表20に掲げた。主体を占めるのは江戸時代以降の瓦であるが、特筆すべき点として小型の菊文様をもつ軒丸瓦が多いことがあげられる。これらは主に組棟の棟飾りや、薨棟に用いられるものである。『大乘院四季真景図』や『大乘院殿境内図』などを見ても、建物の多くは組棟を用いた上で柿など植物性のものを葺いたように描かれており、そのような状況が出土瓦にも反映しているのであろう。(林 正憲)

土器・土製品

整理用コンテナにして25箱が出土した。そのうちの多くが鎌倉時代の土器で、上層の包含層や各遺構のベースとなる土層に多量に含まれるため、個々の遺構の時期を決めるのは難しい。ここでは、まとめて出土したものを中心に報告する。

1~6がコンクリート基礎内で検出したSK8982の埋土である炭層から出土した土師器と瓦器である。1、2が丸みをもった土師器の大皿で、口径は14cmを超える。2はとくに口縁に近いところのみヨコナデするのが特徴的である。対して4、5は小皿で、4は口縁端部をわずかに内側に折り返している。3が瓦器椀。内面見込みにジグザグ文の暗文があるが、胴部内面のミガキによって切られる。貼り付けの高台はやや断面が三角形に萎縮し

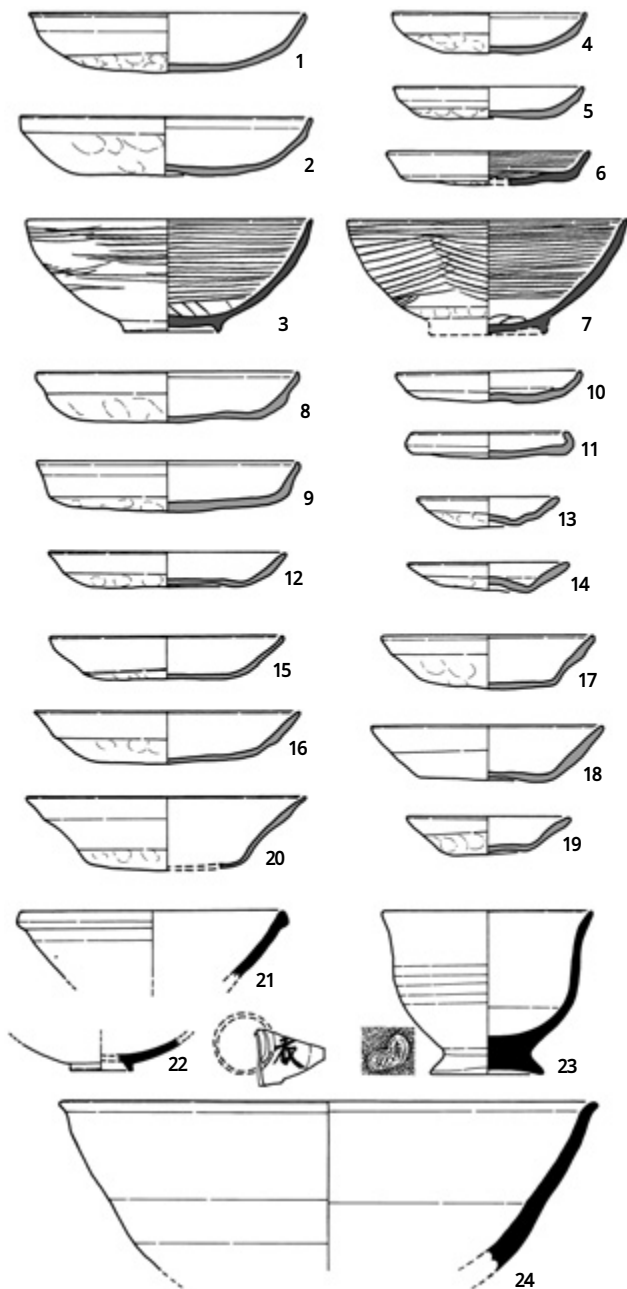


図147 第390次調査 出土土器 1:4 (拓影のみ1:2)

ている。6の瓦器皿は体部内面の丁寧なミガキと見込みのジグザグ文の暗文が観察できる。これらは生活で生じた炭といっしょに穴を掘って捨てられた一括品と見られ、平安時代末、12世紀初め頃のものであろう。したがって、この地に大乘院が移る前の禅定院に関するものであることを推測させる。

7は井戸SE8981の最下層から出土した瓦器椀であるが、井戸の埋土から出土した遺物は少ない。内面の暗文

はらせん文となっているが、外面のヨコミガキは比較的に密に施してある。先の3とほぼ同型式とみなしてよいだろう。

8～11が第374次調査でも多数出土したSX8829に投棄された土器である。今回も瓦器が混じることはなかった。8、9が大皿で、平安時代に比べると法量の縮小が進んでいる。10が小皿、11がいわゆる「コースター」状の皿である。総じて13世紀のもので、池の西岸がさかんに改作されている時期の活動痕跡とみなされる。

12～14は調査区中央の土層観察用畦に現れた遺構検出面から切り込まれた小ピットSK9001に埋納されていた一括土器である。いずれも室町時代の白色系土器にあたり、12が大皿、13、14が小皿でいわゆるへそ皿である。12は器高が低く、全体に奈良市中筋町遺跡SG07出土資料に類似する。15世紀末から16世紀初め頃のものであろう。

15～19は第374次調査でも検出した特殊遺構SX8830の埋没段階で投棄された土器群である。15、16が白色系、17～19が赤褐色系の土器で、そのうち19が小皿である。このように白色系と赤褐色系の区別がいまだはっきりしていることから、15世紀後半でもあまり下らせることはできないだろう。

20は石組SX8970が廃絶する段階で捨て込まれた状態で出土したもので、口径14.8cm、器高3.0cmを測る。胎土は白くて精良な白色系である。平らな底部から角度をもって立ち上がった体部は外反しながら器厚を増し、端部に向かって薄く仕上げる。15世紀前半くらいのものであろうか。

21は白磁の椀。断面が三角形状に肥厚する口縁をもつ。池の西岸から出土した。11世紀後半から12世紀前半のもの。建物基礎内の上述の遺構と時期的に重なる。

22は削り出しの高台部分を含む体部下半を除いて浅黄色に施釉してある椀。露胎部分には「衣」と読むことのできる墨書がある。23は池岸に貼り付いて出土した赤膚焼の杯である。須恵質の胎土に底部以外釉を漬け掛けして仕上げてあるが、乳灰色の厚い不透明な釉を、まず高台以外の部分に掛け、その後それをさらに覆うように白緑色半透明の釉を底面を除いて掛けている。底面は中央がわずかにくぼみ、1ヵ所「赤八タ」(赤膚)のスタンプを押してある。SB8983やSB8985で使用したものである

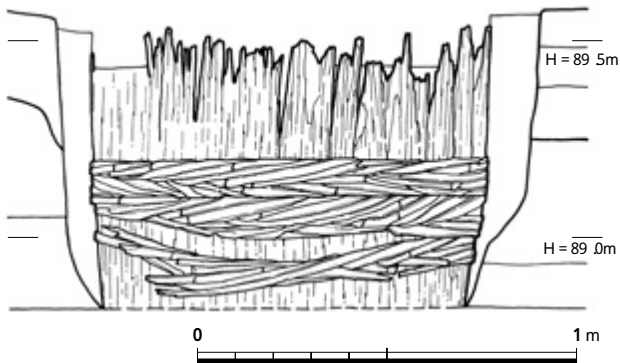


図148 水溜遺構SX8986 立面図 1:20

うか。22ともに江戸時代後期のものであろう。

24は今回の出土土器の中で、珍しい器種に属する。須恵器の鉢で、SK8997の中からみつかった。下層の遺物、すなわち13世紀頃のものと思われる。高温で硬質に焼けた整品で端部をわずかに外反させる。

以上のほかに、本調査では奈良時代の土師器、須恵器、平安時代の緑釉陶器、近世以後の陶磁器などが出土している。また、埋め戻し土の中から5世紀後半の円筒埴輪片1片がみつかった。

(高橋)

木製品

もっとも注目すべきは水溜遺構SX8986に使われた大型桶である(図148)。この大型桶は、36枚の側板を3条の箍で締めてつくられており、個々の側板の幅は約8cmに規定されているようである。底板は5枚の板材で構成されており、側板の底から10cmほど上で固定されている。固定に際しては、底板の端部をやや鋭角に削りだしているものの、側板にはそうした工夫は認められない。また、目釘などは現状では確認できない。

さて、この桶の大きな特徴として、底板外面の墨書と焼印に注目できる(図149)。まず、墨書は底板の中央に書かれており、「水溜」と判読できる。一文字の大きさは30cm×25cmの範囲におよぶ。おそらく、この墨書は桶の機能を示しているのであろう。また、墨書の文字が3枚の底板にわたっていることから、この文字は桶が完成してから書かれたと判断できる。つぎに、焼印は異なるふたつの焼印を上下にならべて一連のものとしており、それを2ヵ所に押捺している。それぞれ記号化の傾向が顕著であるものの、「大」と「乗」という文字をあてることができる。この焼印の意味するところは、この桶が大乗院庭園での使用を目的として製作されたことであろう。な



図149 水溜遺構SX8986の桶の底

お、側板および底板の樹種はスギであり、箍はタケである。

そのほか、コンクリート基礎内の穴から「本嘉納」の焼印をもつ樽や鉄芯付独楽などが出土している。いずれも、近代に属する。

金属製品・動物遺存体

金属製品の出土は少なく、わずかに鉄釘、寛永通寶、不明環状銅製品などが認められる程度である。また、調査区の西北部から、鋸による切断痕をもつウシの骨が30点あまり集中して出土している。大腿骨と上腕骨が過半数を占めており、また、それらはほぼ例外なく骨端部に相当する。したがって、これらは骨製品の製作過程で廃棄された不要部位と考えられる。なお、帰属時期は包含層出土のため決定が困難であるが、おおむね中世に比定できる。

(和田一之輔)

まとめ

西小池南池東半については東大池との接続箇所などいままなお部分的に不明なところも残ってはいるが、今回の調査によって約600㎡の広さをもつ西小池のほぼ全容が解明された。新たな知見としては、西の池尻に排水施設を備えており、堰によって水量を調節していたこと、東岸を狭める改作のあとがみつかったことなどが大きな成果と言えよう。

池の水位は堰SX8976の残存最高所の標高89.6mに若干の数値を足した値になると計算されるが、それでも西小池北池で想定している水位が90.1mであるのと比べて約0.5m低いことになる。北池の水は中池を通過して南池に流れ込み、東大池からの水とともに不要な水を南から排水する構造になっていたのである。

また、陸地部分の本格的な調査によって池と庭との関係や御殿部分を考える手がかりが得られたことも重要である。なかでも、池の西側にある庭園観賞施設としての性格が考えられる建物SB8993がその西に立つ塀SA8994とともに検出できたことの意義は庭園の広がりや鑑賞の仕方を復原する意味においても大きな意味をもつ。SB8993は3畳ほどの面積しかないが、それに濡れ縁がつくあずまや風の建物は、『大乘院四季真景図』にある「湛雪亭」に対応する性格を有することは間違いなからう。

また、複数残る絵図にも御殿とあずまやを結ぶ遮蔽施設にいくつか異なる構造のものがあるように、あずまやの構造とともに御殿とのつながり方についても時期的な変遷があったことが推し量られる。幾度かの変遷のうち掘立柱塀の遺構だけが残ったものだろう。渡り廊下で結ばれていた時もあったと思われるが、その遺構は削平されたと見られる。

ところで、あずまやの遺構の性格をより豊かにする上で塀の西側でみつかった2基の水溜は重要である。建物を使用の際にそこに溜めてある水がさまざまに利用されたに違いない。複数あることは上述の変遷に対応する。

上述の諸遺構の積極的な理解は、『興福寺旧大乘院庭苑図』（1939年模写）との図面の対応からより支持される（図150）。庭苑図に18世紀中頃に作られた隆遍僧正の大乘院指図をあわせたものに遺構図を重ねると、以上の比定の正しさが再確認できるとともに、今回検出できなかった寝殿の位置なども確認できる。

それによると、塀SA8994の一番北側の柱間が広いところが御殿（SB9000）そのものの場所であることがわかる。つまり、一番北側の一間は御殿の遺構である可能性が高いのである。そして、御殿の身舎部分を避けるように南に方形土坑3基が作られたと理解できるのである。

こうした復原整備に直接関連する情報のみならず、江戸時代以前のことにしても豊富な情報を得ることがで



図150 御殿と遺構群の関係

きた。とくに、御殿の下に位置する礎敷遺構SX8830は、その全体像が判明し、石組のSX8831とセットの可能性のある特異な構造をもつものとして注目される。出土土器からすれば、善阿弥が登場する段階に廃棄されたらしく、西小池以前の当地の様子を伝えている。コンクリート基礎の南でみつかったSX8970などとあいまって、西小池が登場するまでにはさまざまな庭の意匠や建物が展開していたことが窺われる。

この景観を一変させたのが善阿弥の改造であった。現状で4800㎡の規模をもつ東大池の前にわざわざ西小池を設けたのは、西から庭園を立体的に眺めるための大変革であり、湛雪亭はその象徴的な施設だったと言えるのではなからうか。（高橋）